

る、年廿三、出家はもとより望みなりけれども、心ならず尼になされ、こき墨染にやつれはて、嵯峨のおくにぞすまれける、無下にうたてき事どもなり、主上はかやうの事どもに御なうつかせ給ひて、終にかくれさせ給ひけるとかや、

〔太平記〕立后事 付 三位殿御局事

阿野中將公廉ノ女ニ、三位殿ノ局ト申ケル女房、中宮ノ御方ニ候ハレケルヲ、君〇後醍醐一度御覽ゼラレテ、他ニ異ナル御覺アリ、三千ノ寵愛一身ニ在シカバ、六宮ノ粉黛ハ、顔色無ガ如ク也、都テ三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一女御、暨後宮ノ美人、樂府ノ妓女ト云ヘドモ、天子顧眄ノ御心ヲ付ラレズ、管ニ殊艷尤態ノ獨ヨク是ヲ致スノミニ非ズ、蓋シ善巧便倭、叡旨ニ先タチテ奇ヲ爭シカバ、花ノ下ノ春ノ遊、月ノ前ノ秋ノ宴、駕スレバ輦ヲ共ニシ、幸スレバ席ヲ專ニシ給フ、是ヨリ君王朝政ヲシ給ハズ、忽ニ准后ノ宣旨ヲ下サレシカバ、人皆皇后元妃ノ思ヲナセリ、驚キ見ル光彩ノ始テ門戸ニ生ルコトヲ、此時天下ノ人、男ヲ生ム事ヲ輕ジテ、女ヲ生ム事ヲ重ゼリ、サレバ御前ノ評定、雜訴ノ御沙汰マデモ准后ノ御口入トダニ云テケレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ與ヘ、奉行モ理アルヲ非トセリ、關雎樂而不淫、哀而不傷、詩人採テ后妃ノ德トス、奈何セン傾城傾國ノ亂、今ニ有ヌト覺テ、淺増カリジ事共也、